# 調査情報

2015 11−12 NO.527

TBS TOKYO BROADCASTING SYSTEM

「ワイドFM」スタート

## ラジオ・ルネッサンス2015

戦後70年

## 「一強」政治の中間評価

# 三陸の思いを紡ぐ

第17回

## ～未曽有の災禍を忘れないために～

佐々木智之
東北放送　報道制作局専任部長（震災報道担当）
石巻支局長・気仙沼支局長

土砂運搬のベルトコンベヤーのために作られた仮設橋「希望のかけ橋」。地元の小学生が名付けた（写真は全て筆者による）

三陸沿岸で9月13日、3回目となる自転車イベント「ツール・ド・東北2015」が開催された。今回は宮城県石巻市を発着する4つのコースに加えて、新たに気仙沼市発・石巻市着のコースもできた。全国から約3500人が参加し、復興が進みつつあるなか、津波の爪痕も残る沿岸の道路を走った。参加者の一人、木島隆司さん（54）は気仙沼で歯科医をしていた弟の研さん（当時45）を津波で失った。木島さんは形見のロードバイクで気仙沼フォンド（コース）に出場。研さんの亡くなった場所も通って211キロを完走し、「弟と一緒に並んだつもりで走った。夢が叶いました」と振り返った。三陸はこれからも被災者と全国の人たちの交流の場であり続けなくてはならない。そんななか、被災地を訪れる人たちを迎え入れるべく立ち上がった人たちがいる。

### 復興が進む被災地を「学びの場」にと奔走する女性

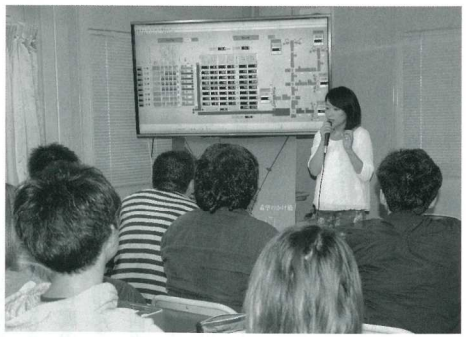
「ガタガタガタ」。津波で壊滅した岩手県陸前高田市の旧市街地にどこからともなく鈍い音が響き渡る。その主は広大な更地で去年3月から稼働してきた巨大なベルトコンベヤー。高台造成で出た土砂をかさ上げに使うために運搬するのだ。このコンベヤーを一般の人たちが見学できる〝復興最前線〟ツアーは、関東を始め全国から訪れる企業や学校に「貴重な体験」と好評を博している。企画しているのは「まるごとりくぜんたかた協議会」（伊藤雅人代表）で、スタッフは伊藤さんを含めて地元の20代、30代の6人からなる。

「このベルトコンベヤーが新しいまちの基礎をつくってくれています」。9月上旬のある日、協議会のスタッフの一人、河原牧子さん（34）がツアーのガイドを務めていた。ツアーでは事業を請け負ったゼネコンの担当者から最先端の土木技術が投入された工事の概要について説明を受ける。コンベヤーの導入でダンプカーなら9年はかかる工期を6分の1に短縮できる上、交通事故や渋滞、$CO_2$の抑制も期待できるという。ベルトコンベヤーは約10メートルの高さに設けられていて総延長は約3キロ。1日に運搬する土砂は10トンダンプカー4000台分に相当する約2万立方メートル。事業費は150億円にのぼる、被災地でも最大規模の土砂搬出事業だ。

続いてツアーでは、全長220メートルの吊り橋を見学する。人や車が渡るのではなく、ベルトコンベヤーを通すため旧市街地を流れる気仙川に架けられた。対岸には津波を耐えた「奇跡の一本松」も見える。このあと、普段は入れないベルトコンベヤーの始発点となる愛宕山に向かう。ここでは125メートルある山を45メートルまで削ることになっている。工事で出る土砂をベルトコンベヤーで麓の93ヘクタールの旧市街地に送り、高さ9メートルから12メートル盛り土する。山を削った場所は造成して、集団移転の住宅地や災害公営住宅が2016年度中にできる予定だ。また、旧市街地のかさ上げは18年度中に完了する予定で、新たに住宅や商店など新しい街がつくられる。ツアーに参加した人も復興の最前線を目の当たりにして「これほど大がかりとは驚いた」と事業の規模を実感していた。河原さんも「事業を間近に見て『行政や企業の努力で復興は進んでいる』と思うようになった」という。



河原さんは陸前高田市の生まれで、宮城教育大学（仙台市）を卒業後、地元に戻り、小学校や高校で教壇に立っていた。その後、大船渡市で漁業を営む夫（31）と結婚し、3人の子どもを育てている。震災が起きた時は陸前高田市の実家にいて子どもらと高台に避難し、自宅のある大船渡市にいた夫を含め家族は全員無事だった。2階建ての自宅母屋は1階が浸水したため、津波を逃れた自宅作業所で仮住まいをするなどし、11年4月末に片付いた自宅での生活に戻った。その後、学習塾や高校で教えながら、「まちの復興に何か役に立ちたい」と思い続けてきた。こうしたなか、ボランティアセンターを運営するなど支援活動をしていた幼なじみの伊藤さんが去年4月から被災地ツアーの受け入れを始め、7月から窓口となる、まるごとりくぜんたかた協議会を立ち上げた。被災地全体で百数十万人にのぼったボランティアの役割が一段落して訪れる人も減るなか、ツアーで再び多くの人に足を運んでもらい「交流人口」を増やそうというのだ。河原さんは、今年1月から協議会のメンバーに加わり、ツアーの企画やPR、ガイドに携わっている。協議会は、震災遺構や復興事業の視察と漁業や農業の体験を組み合わせた「泊まり込み型」のツアーを目玉にしていて、これまでに全国から約151団体、約1万2000人が参加した。「新しいまちに多くの人に来てもらわないと、本当にまちがなくなってしまう」と河原さんは危惧している。だから、これからもツアーを継続し、この街を訪れてくれる「交流人口」を増や



「まるごとりくぜんたかた協議会」が企画する復興ツアーの案内役、河原牧子さん。中高生の教育旅行を新しい街づくりに繋げるのが目標

したいという。

ベルトコンベヤーは9月15日で運転を終了した。この1年半に東京ドームの4杯分にあたる500万立方メートルの土砂を運搬した。ベルトコンベヤーは今年度中に解体されて、吊り橋も来年秋までに撤去される。ところが運転終了すると、ツアーの参加団体数が減り始めた。「ベルトコンベヤーの存在は大きかったと改めて思いました」という河原さんは、「これからがツアーの正念場」と気を引き締める。これまで協議会は国の緊急雇用創出事業として補助金を受けて運営してきた。しかし、復興事業の見直しで事業は今年度末で終了するのだ。幸いボランティアや研修で来たことのある企業や大学の訪問は続いてる。このため協議会ではツアーの継続に向けて、代表の伊藤さんが市長の出張に同行したり県外の旅行会社の会議に出席したりして新たに中学校や高校の「教育旅行」の誘致に全力を挙げる。河原さんは子育てをしながら協議会の仕事を週に3日から4日、更に高校で週に2日勤務する多忙な日々だ。それでも、将来を担う子どもたちに新しく生まれ変わるまちの未来を託したいと踏ん張るつもりだ。

## 震災を契機に帰郷し街を盛り上げる若き漁具屋の跡取り

「これは一体何に使うか分かりますか?」。9月下旬、気仙沼市の漁具販売会社「アサヤ」本社で取締役の廣野一誠（ひろの いせい）さん(32)は漁業体験のモニターツアーに参加した人たちに問いかけた。車のハンドルほどの大きさでハート型をしたステンレスの輪。答えは、はえ縄漁で釣れたマグロに電気ショックを与えて大人しくさせる漁具「ツナ（マグロの英名）ショッカー」。他にも、アナゴなどが中に入ると出られなくなる筒型の「ハモ胴」、とげが付いた爪楊枝のような形で養殖のホタテに穴を開けて吊るす「アゲピン」、ロケット型の鉛の塊で養殖のロープに付いた海藻や貝類を根こそぎ落とす「メッセンジャー」など。見たこともなければ、使い道も想像できない数々の漁具にみんなは目を輝かせた。ツアーは地元で盛んな漁業について知ってもらおうと観光や食材の開発に取り組む団体などが企画した。参加者はロープの結び方を教わった後、ロープを使ったアクセサリー作りに挑戦し、震災後に地元で起業した菅原理香さん(34)が指導にあたった。「いろんな漁具に好奇心をそそられた」「漁具でアクセサリーができるとは驚いた」とツアーの評判は上々だった。

アサヤは江戸時代末期の1850年の創業で、ロープや網、機械を始め約3万8000点の漁具を取り扱っている。1つ10円程度の小物から数億円の定置網まで漁業に欠かせないものばかりだ。震災前、アサヤの本社は気仙沼市魚市場の向かいにあった。震災で数分間の大きな揺れが続いたあと従業員は向かいの魚市場2階の駐車場に避難した。「とりあえず大丈夫」と思っていたと常務の藤野茂康さん(63)は振り返る。しかし、当初6メートルだった津波予想が10メートルに切り替わった。「もうここで踏ん張るしかない」と腹をくくった。津波の第1波が気仙沼湾に到達し、真っ黒い海水が押し寄せ、たった2分で1階の天井まで達した。繋留されていた漁船は流されて、漁港の建物は倒れて土ぼこりが舞い上がる。雪のちらつくなか複数の火災も発生した。藤野さんは従業員と海水に浸かりながら夜道をライトを頼りに高台まで歩いて何とか避難し、本社にいた従業員は全員無事だった。だが、社内全体では2人が津波の犠牲になった。工場は2か所とも無事だったものの、本社と岩手県宮古市、釜石市、宮城県石巻市の営業所が全壊した。「ゼロからの出発。漁業被害は甚大でしばらくはなかなか注文がないだろう」と藤野さんは思っていた。ところが、早くも震災発生の2週間後には漁業者から注文が入り始めた。こうしてアサヤは会社再建に乗り出すことができた。

廣野さんは、アサヤの経営一家の長男で、早稲田大学を卒業し東京でIT企業に勤めた後、ベンチャーの設立に加わった。震災発生後、アサヤの社長である父・浩さん(62)とは10日間連絡が取れなかったものの浩さんを含めて家族は全員無事だった。少しでも被災地が落ち着いてからとゴールデンウィークに帰省し「がれきだらけの街に衝撃を受けた」。2年後に帰省したら「がれきはなくなり、がらんとしていた」。そこで大学を卒業した頃から「いずれは家業を継ごう」と思っていたという廣野さん、「復興はこれから。今しかない」と故郷に戻る踏ん切りがついた。子どもが生まれたり、住まいのめどが立たなかったこともあって、ようやく去年12月に妻と子どもを連れて帰郷しアサヤに入社した。ただ、中学校、高校は大阪で、大学からは東京と長らく気仙沼を離れていたこともあり、「家業とはいえ、漁具のことは全くわからなかった」。だから、従業員に会社や商品について一から教えてもらった。少しずつ仕事の楽しさも分かり、これまでの経験を生かして社内の情報共有システムを構築するなどITを活用した業務の効率化を進めている。また、ホームページも見やすいように作り直した。

漁具販売・アサヤの廣野一誠取締役（左）と藤野茂康常務。手にしているのは、釣ったマグロが暴れて傷まぬよう気絶させる「ツナショッカー」

更に帰郷して「漁業以外にも魅力があるのに生かされていない」と感じた廣野さんは、まちの魅力を再発見し観光につなげようという市民団体の取り組みに参画すると共に、9月からは観光客の視察を受け入れて、漁業を支えてきた〝漁具屋〟の舞台裏を紹介している。漁業だけでなく観光で気仙沼を盛り上げようというのだ。「訪れる人が増えれば、高齢化や後継者不足が深刻な漁業にとっても刺激になる」と廣野さんは言う。おととし10月には、仮設の建物だった本社を内陸側に再建した。現在は社員数76人で、売り上げは震災前の水準まで回復した。「これからも地域の漁業を支えたい」という漁具屋の若き後継者、経営に本腰を入れると共に、気軽に漁業に触れることのできる街にしたいと意気込んでいる。

## 2度の津波を体験し 復興のあるべき姿を説く語り部

「私たち人間が自然の海から奪った土地につくった建物や住んでいた人々を『取られたものを返してもらうぞ』と言わんばかりに自然の津波がすべて海に持ち去ったように思える」。南三陸町志津川（旧志津川町）の防災対策庁舎前で町外から訪れた人たちに話すのは、後藤一磨（かずま）さん（67）。震災の語り部として活動している。防災対策庁舎は、宮城県が震災の20年後まで県有化し、その間に南三陸町が保存か解体か判断することになった。復興事業が本格化した志津川では、津波の脅威を伝える震災遺構は防災対策庁舎と結婚式場だった高野会館くらいしかない。後藤さんは「どんなに雄弁に語り部をしても、被災した物が残っていないと皆さんが来ても震災がどういうものかわからない」と、庁舎が当面保存されることに安堵している。

震災発生時、後藤さんは地元の中学校で同窓会長として翌日の卒業式の準備をしていた。立っていられないほどの揺れに襲われて「絶対に津波が来る」と確信した。すぐに自宅に戻り、妻と長男を連れて高台に避難した。数十分後に巨大な津波が押し寄せ、堤防を乗り越えてものすごい音とともに建物を倒しながら町を飲み込んだ。「自宅が浮き上がり引き波で消えていくのを呆然と見るしかなかった」。20日ほど避難所にいた後、内陸の加美町（かみまち）に4か月ほど2次避難した。その後、地元にできた仮設住宅に移った。その頃、被災地にはボランティアや復興イベントに多くの人がやってきて「震災や町のことを知りたい」という要望が寄せられるようになった。そこで震災前からボランティアの観光ガイドをしていた後藤さんに白羽の矢が立った。さっそくガイドの仲間に声をかけると12人が集まった。ガイドサークル「汐風」を立ち上げ、被災地に来た人たちに体験を語った。なかでも後藤さんは郷土の歴史に詳しく、町の文化財保護委員も務めている。だから、単に体験を振り返るだけでなく、志津川の自然と歴史、過去の津波から今回の震災を位置付け、伝えるべき教訓を浮き彫りにするよう努めた。また、被災地の現実を知ってもらうため、きれいごとだけでなく、言いたいことは何でも本音で言うようにした。

今回の津波で、防災対策庁舎では防災無線で避難を呼びかけ続けた町職員の遠藤未希さん（当時24）ら43人が犠牲になった。志津川は江戸時代の初めに仙台藩が海だった場所を埋め立てて街道をつくったところに宿場町ができたのが始まりとされる。防災対策庁舎は1995年に建てられた。しかし、41人が志津川で犠牲になった60年のチリ地震津波で2・4メートルと2階の床くらいまで浸水した場所である。当時、中学1年生だった後藤さんは海の水が引いて底が見えたことを鮮明に覚えている。「庁舎の住所は『塩入』。つまり潮が出入りする海抜ゼロメートルの埋め立て地。そんな場所に防災の拠点を建てたのは大きな過ち」と。更に「当初の津波予想が6メートルだったため職員を庁舎に留まらせた町長の判断ミスも重なった」と指摘する。

志津川では現在、市街地を10メートルかさ上げし、商店や工場などを再建することにしていて、そこに住宅は建てられない。住宅は山を切り崩した海抜20メートル以上の場所に再建される。ところで今から3000年から6000年前に生きていた縄文人の遺跡が発掘されている高台には今回の津波は来ていない。「縄文人は安全な場所を知って暮らしていた。今回震災を経験した私たちは長い年月を経てようやく縄文人の知恵に学ぶことになった」と後藤さんは感慨深げだ。しかし、「人間は怠け者だから高台は不便だということで次第に平地に下りてきて同じ過ちを犯すかもしれない」と懸念する。また、志津川湾に建設される高さ8・7メートルの防潮堤については、「震災で水門が役に立たなかった現実を知ってなのか、それとも予算の都合でそうなったのかは定かでない」といい、「行政や政治家は震災から何も学んでいない。予算と制度に終始している」と辛らつだ。

今も後藤さんは仮設住宅で妻と暮らしている。来年夏には高台に自宅を再建する予定だ。今後は語り部を続けるとともに、後藤さんが震災後に立ち上げた団体「復興みなさん会」で仮設住宅を出て新しい住まいに移る人たちのコミュニティづくりを支援することにしている。更に後藤さんが中心になって去年6月に建てた交流施設「みんなの家　汐だまり」を通して、町外の若者を呼び込む取り組みを進める。それは「過疎・高齢化に震災が追い打ちをかけた。若い人が入ってこないとこの町はなくなる」との危機感があるからだ。震災の語り部は、復興のリーダーとして休む暇もない。

南三陸町志津川の防災対策庁舎前で震災当時の様子を話す語り部の後藤一磨さん。独自の視点で復興と防災のあるべき姿を全国から来た人たちに訴える

## 様々な自然災害に見舞われる日本

このところ、全国で大きな災害が相次いでいる。震災発生から4年半の9月11日、前日の関東に続いて宮城県に未明から大雨特別警報が出された。TBSテレビの新入社員の研修に同行していた私は大雨に関する情報を伝えるテレビやラジオに釘付けになった。「天災は忘れた頃にやって来る」と物理学者で随筆家の寺田寅彦は「防災科学を説く時にいつも言っていた」という（※）。その言葉の通り、日頃から警戒していた地震ではなく、数十年に一度の大雨。この関東・東北豪雨で宮城県も河川堤防の決壊や氾濫が相次ぎ2人が死亡した。その1週間後の18日未明、今度はチリ沖で発生した地震の津波で、日本の太平洋沿岸などに津波注意報が出された。2010年に起きたチリ沿岸地震の津波では宮城県も大きな漁業被害が出ただけに三陸には緊張が走った。目立った被害はなかったものの、改めて震災当時を思い出した人も多かったはずだ。

「災害を忘れない」。そして「決して油断しない」。そう改めて自戒した。

※　国立国会図書館レファレンス



ささき・ともゆき／1960年生まれ